

# 有關話題中人物之敬語表現研究 以上班族的調查資料為主

吳岳樺

高雄餐旅大學應用日語系副教授

## 摘要

本論文以台日上班族為調查對象，解析雙方對話題中人物敬語使用之情形為目的。主要結論歸納成以下四點：

(1) 當聽話者是一般員工時，台灣員工對話題中人物的組長、科長等上司使用敬語的情形不明顯；相對上日本員工有過半數以上會使用敬語。

(2) 當聽話者是組長或科長時，話題中人物比聽話者職位小或同等時，說話者對話題中人物使用敬語等同對聽話者表達出敬意之情形普及。該使用情形日本員工比台灣員工明顯。

(3) 上述情形之使用通常在話題中人物的位階較高或是外部員工的情形居多。另外調查也指出該用法顯示出日本員工重視內外部門差異多過階級差異。

(4) 整體而言，日本員工使用第三者敬語情形比台灣員工頻繁。但話題中人物是部門的最高位階經理時，雙方高比例的敬語使用則無差異。

關鍵詞：話題中人物、敬語、第三者敬語、上下關係、內外關係

受理日期：2015.03.13

通過日期：2015.10.30

# **The practice of attaching honorifics to individuals under discussion in conversations - based on surveys targeting salary men**

Wu, Yueh-Hua

Associate Professor of Department of Applied Japanese,  
National Kaohsiung University of Hospitality and Tourism

## **Abstract**

The present study centers its focus on Taiwanese and Japanese salary men, analyzing the practice of attributing honorifics to individuals under discussion in conversations. The following points could summarize the conclusion:

1) When the interlocutor is a fellow colleague, it is not frequent for the Taiwanese salary men to apply honorifics to superiors under discussion; while more than half of the Japanese do.

2) When the interlocutor is a superior and the individual under discussion is lower or equal in rank to him, to show respect for the interlocutor, the speaker attaches honorifics to the individual under discussion. The frequency is higher among the Japanese.

3) The above situation occurs most frequently when the individual under discussion is a superior or someone belonging to other departments. The survey also shows that the Japanese salary men place more importance on the differences between departments than on ranks.

4) On the whole, the employment rate of honorifics among the Japanese salary men is higher than their Taiwanese counterpart. However, when the individual under discussion is of top rank, both the Japanese and Taiwanese show high frequency of utilizing honorifics.

Keywords: individual under discussion, honorific, referent honorific, pecking order, inner-outer relationship

# 話題人物の敬語表現に関する研究 ——会社員のデータを中心に——

呉岳樺

高雄餐旅大学応用日本語学科准教授

## 要旨

本研究は台日の会社員を対象としたアンケート調査を行い、第三者敬語の使用実態の一端を明らかにすることを目的とした。考察した結果は次の通りである。

(1) 聞き手が一般社員の場合、台湾人会社員（以下、T）は話題人物の上司である係長や課長のことをあまり上位に待遇しない傾向があるのに対して、日本人会社員（以下、J）は半数以上が上司のことを高めていることが観察された。

(2) 聞き手が係長や課長の場合、話題人物が聞き手から見て同等以下の人でも、話し手がその人を高めることで結果的に聞き手のことも立てることになる。いわゆる「第三者敬語の聞き手敬語化」が顕著である。JはTよりその使用率が高いことが明らかになった。

(3) 「第三者敬語の聞き手敬語化」の使用をより詳しく考察した結果、一般社員よりは係長、係長よりは課長、それから同じ部門の者よりは他部門の者を話題人物とする場合に多く用いられることが明らかになった。その使用について、Jでは、階級よりもウチソトの関係が優先されることが分かった。

(4) 全体的にJはTより「第三者敬語」を多用する傾向があるが、自他部門の最上位者である部長について言及する際、第三者敬語の使用率が最も高いことが TJ 共通であることが分かった。

キーワード：話題人物 敬語 第三者敬語 上下関係  
内外関係

# 話題人物の敬語表現に関する研究 ——会社員のデータを中心に——

呉岳樺

高雄餐旅大学応用日本語学科准教授

## 1. はじめに

日本語の敬語表現の基準になる要素としては、親疎関係、上下関係などさまざまなものがあげられる。これらの要素は時と場面に応じて敬語表現の選択の要因となる。これまで聞き手の敬語に関する研究は多くなされているが、話題人物（第三者敬語）についての研究はまだ少ない。日本語の場合、話題人物に対する敬語は、話し手と聞き手との関係、そして話し手、聞き手と話題人物との関係などが運用の基準になると考えられる。本研究では、台湾と日本の会社に勤めている会社員に着目し、台湾人会社員と日本人会社員の敬語表現の異同を調べると共に、会社で使われている敬語使用の実態を分析することを目的とする。

## 2. 第三者敬語の異論と本研究の位置づけ

### 2.1 第三者敬語の異論と先行研究

近年第三者敬語の研究は数多く行われているが、これらの研究の大半は大学生の使用実態に注目したものが多く、社会人やビジネスマンの使用実態に注目したものはそれほど多くない。さらにこれらの研究のほとんどが、日韓の第三者敬語の対照研究であると言っても過言ではない。韓国語は「絶対敬語」の性格が強いとされているため、対照研究の焦点になっていると考えられる。日韓の対照研究について、ここでは触れないが、第三者（話題主）を高めるかどうかについての先行研究の結果を紹介したい。主に 2 つある。三上（1972）によれば、第三者を上げすぎることは、相対的に聞き手を下げる効果を表すことになるから「失礼」である。また、「話題主を上位に待遇できるのは、その話題主が聞き手の上位者である場合に

限定され、そうでない場合には、いくら話題主が話し手の上位者であっても、その話題主を上位に待遇する表現は用いられないということになる」と述べている。この点に関しては、辻村（1977）にも同様の観点がある。しかし、同じように敬語法における聞き手の位置の重要性を唱えながらも、三上等とは相反する考え方がある。代表的な説は井上（1972）「第三者への敬語の丁寧語的用法」である。この用法は「第三者への敬語は、第三者を尊敬するためでなく、実は話し相手への敬意を表すために用いられている」というものである。井上は、話し手と聞き手に着目しており、聞き手と話題主との関係によるこの用法の限界については言及されていないが、話題主を上位に待遇することにより、間接的に聞き手を待遇しようとする傾向を説明している。両方とも、聞き手を重視している点では一致しているが、話題主に対する敬語の使用が異なっている。つまり、話題主に対する敬語の抑制と使用という全く逆の作用が生じているのである。たとえば、課長と話す場合には、話題主の係長を上位に待遇すべきか否かという迷いが生ずることになる。このように、話題主が話し手の上位者かつ聞き手の下位者である場合には、話題主を上位に待遇する表現を使うか否かという意識の葛藤が特に強いと思われる。

また、敬語使用の際に、いったいどのような属性を優先的に考慮されるかについて、芳賀（1979）は「敬語の場合には、話題の条件がさらに区分されて、話題の中で言及される人物や事物が、話者に対して上位の者か下位の者か、あるいは対等の者かという上下関係、身内の者か他人かという内外関係がさらにその言葉構造の決定要因になるようである」と「上下関係」と「内外関係」をあげている。さらに井上（1983）は社会構造の変化と敬語の将来について、「話し手と話し相手との心理的親疎関係を重視しよう（後略）」との見方を示している。鄭（1987）は、第三者に対する待遇は聞き手との上下関係によって選択されるとの結論を示したが、一方、荻野（1991）が「相対敬語的な性格が強まれば、敬語の使用基準は必ずしも上下

関係に限定されず、親疎関係をはじめさまざまな社会関係によって使い分けられるようになろう」と指摘しているように、第三者への敬語使用は聞き手との上下関係によって規定されるとしても、上下関係以外の要因による影響がまったくないとは言い切れない。特に、日本語の場合、話題の人物に対する敬語は、話し手と聞き手との親疎関係、そして話題人物が話し手と聞き手のどちら側に属するかという「内外関係」が考えられる。しかし、話題の人物を「ウチの者」と見なすべきか、「ソトの者」と見なすべきかの判断はたいへん難しい問題である。たとえば、大企業の支社を例にあげるとすれば、そこには本社と支社の関係といった問題がある。本社にしる、支社にしる、グループは一つであり、企業の外側からみると、そこで働いている全員が同じグループに属する者、つまり、すべて「ウチの人間」と見なされがちである。ところが、実際に行われる敬語使用の状況を見てみると、支社の者が本社の者に対して自分の上司のことを上げて待遇しないケースも多く観察される。「集団外の者に対して身内の者を高めてはいけない」といったルールは現代日本社会ではかなり一般的であるが、実際の運用の場面ではどこまでをウチと見なすか、というルールの運用の範囲において迷いが生じる場面は少なくないと思われる。

## 2.2 本研究の位置づけ

これまで行われた話題人物の敬語研究には、日本語とそれ以外の言語の対照研究、あるいは日本語母語話者と日本語学習者に見られる相違点を取り上げたものが多かった。本研究は台湾人会社員（日本語学習者）と日本人会社員の比較研究なので、後者の研究領域に属する。従来の研究では、大学生を被調査者とする傾向があったが、第三者敬語の研究としては、調査対象が大学生に限られている点に問題がある。なぜなら、大学生の敬語運用力は会社員のそれよりも低いと考えられるからである。ここでは、従来 of 大学生の対照研究とは異なり、会社員を対象に台湾人会社員（以下、T）と日本人会社員（以下、J）の第三者への敬語使用を「階級による上下関係」と「会

社内部での内外意識」に絞って考察する。特に、上述したように話題主が話し手の上位者かつ聞き手の下位者である場合には、話題主を上位に待遇する表現を使うか否か、そして会社内の「ウチソト」に対する判断はどこまで通用するか、などの問題を解明したい。そのため、台日の会社員を対象とした調査により、両方の話題主への敬語使用の実態を分析し、それぞれの特徴を明らかにする。今回、会社内の場面で自分の部門の人を聞き手とし、話題主である第三者に自他部門の一般社員、係長、課長、部長といった具体的な相手を設定し、会社内部での内外意識の有無を調べることをも試みた。

### 3. 調査の概要と内容

#### 3.1 調査方法と対象

本研究では調査方法としてアンケート調査を用いた。アンケート調査は台湾では2014年10月から12月にかけて、日本では2015年1月から3月にかけて行った。被調査者は、会社員（台日とも）であることを条件としている。台湾の会社員は日系企業に勤めている一般社員が中心であり、日本の会社員は日本の企業に勤めている一般社員が中心である。被調査者は一般社員が主なので、年齢は20代と30代の人ほとんどであった。

被調査者は男女合わせて119名である。詳細<sup>1</sup>は台湾人会社員61名（男性19名、女性42名）と日本人会社員58名（男性27名、女性31名）である。台湾人会社員は皆日本語能力試験二級以上のレベ

---

<sup>1</sup> 括弧で示したのは男・女の人数である。

台湾の日系企業：日東光學、光馳科技、豊田、東京威力、東應化、村田機械、佳能などである。合計61名（19・42）。

日本の企業：株式会社ヤガミ、株式会社ECS、株式会社日本セルコ、資生堂、近畿調剤株式会社、ユニクロなどである。合計58名（27・31）。

ルである。

### 3.2 調査内容

話し手の聞き手及び話題主との関係が話し手の話題主への敬語表現に及ぼす影響を明らかにするために、「上下関係」、「内外関係」という2つの要因が絡み合ったそれぞれ18種類の場面を以下のように設定した。本研究では、2つの要素に絞り、研究を進めていくため、他の要素のコントロールをする必要があると考え、同じ部門（他の部門）の一般社員の年齢と職歴は回答者（一般社員）と同じ（同期）であり、係長（課長・部長）の年齢と職歴は一般社員より上であると仮定した。場面の人物と関係の詳細を示すと、表1になる。

表1 場面の人物と関係

場面	話し手	聞き手	話題の人物	
01	一般社員（自分）	一般社員	一般社員	同じ部門
02	一般社員（自分）	一般社員	一般社員	他の部門
03	一般社員（自分）	一般社員	係長	同じ部門
04	一般社員（自分）	一般社員	係長	他の部門
05	一般社員（自分）	一般社員	課長	同じ部門
06	一般社員（自分）	一般社員	課長	他の部門
07	一般社員（自分）	係長	一般社員	同じ部門
08	一般社員（自分）	係長	一般社員	他の部門
09	一般社員（自分）	係長	係長	他の部門
10	一般社員（自分）	係長	課長	同じ部門
11	一般社員（自分）	係長	課長	他の部門
12	一般社員（自分）	課長	一般社員	同じ部門
13	一般社員（自分）	課長	一般社員	他の部門
14	一般社員（自分）	課長	係長	同じ部門
15	一般社員（自分）	課長	係長	他の部門
16	一般社員（自分）	課長	課長	他の部門



17	一般社員（自分）	課長	部長	同じ部門
18	一般社員（自分）	課長	部長	他の部門

周囲には誰にもいない場合だと設定した。調査場面の内容は次のとおりである。

あなたが会社の廊下を通過中。同じ部門の（一般社員、係長、課長）があなたに「田中さん（話題の人物）は今会議室にいるかどうか」を尋ねました。あなたは田中さん（話題の人物）が今会議室にいると言いたい場合、「いる」のところをどう言いますか。

説明：あなたは一般社員であると仮定する。同じ部門（他の部門）の一般社員の年齢と職歴は自分と同じである。係長（課長・部長）の年齢と職歴はすべての一般社員より上である。

### 3.3 分析方法

今回収集したデータを「聞き手が一般社員（01～06）」「聞き手が係長（07～11）」「聞き手が課長（12～18）」という3つの部分に分けて考察していきたい。そして、回収したデータに対して、台湾人会社員と日本人会社員との間で、統計的な有意差があるかどうかをZ検定で検討した。Z検定とは、正規分布を用いる統計学的検定法で、標本の平均と母集団の平均とが統計学的にみて有意に異なるかどうかを検定する方法である。Z検定を用いるにはいくつかの条件に適合しなければならない。最も重要なのは、Z検定は母集団の平均と母数を用いるものであるから、これらがわかっていなければならないということである。標本は母集団から抽出された単純ランダム標本でなければならない。また母集団は正規分布に従うことがわかっていなければならない。ただし母集団が正規分布に従うかどうか判然としない場合でも、用いる標本のサイズが十分大きければ（一般に30から40以上ならば）よい。Z検定における検定の棄却域は、有意水準 $\alpha$ %のとき、両側検定では、標準正規分布の両側 $\alpha$ %点を

超える範囲が対応する。

#### 4. 調査結果と分析

以下の各表は、場面別に台日会社員の敬語使用を示したものである。各場面ごとに台日会社員の敬語使用が見られる。ここでは、敬語使用の異同に着目して、すべての場面を取りあげて使用傾向を考察する。

##### 4.1 場面 1～6（聞き手が一般社員）

表 2 T と J の統計表（場面 1 と 2）

被調査者 場面と用語別	T	T	J	J
	人数	比率	人数	比率
01 いる	22	36.1%	16	27.6%
01 います	39	63.9%	36	62.1%
01 いらっしゃいます	0	0%	6	10.3%
02 いる	8	13.1%	9	15.5%
02 います	52	<u>85.2%***</u>	34	58.6%
02 いらっしゃる	1	1.6%	2	3.4%
02 いらっしゃいます	0	0%	13	22.4%

\* $p < .05$  \*\*  $p < .01$  \*\*\*  $p < .001$

※下線で示したのは場面 T の使用率が高い場合である。

網掛けで示したのは場面 J の使用率が高い場合である。

表 2 は聞き手が自部門の一般社員の場合で、自他部門の一般社員（場面 1 と 2）が話題人物であるときに何と云うかという質問に対する結果を示したものである。統計結果から分かるように、場面 1 と 2 において、T と J は「います」を多用する傾向が共通である。しかし、T は聞き手が自部門の一般社員なら、J と同じく「います」を使う比率（63.9%と 62.1%）が高くなっているが、他部門の一般社

員なら、Tは「います」の比率（85.2%、\*\*\*  $p < .001$ ）がかなり増え、Jは大きな変動がないという結果が分かった。一方、Tにおいては「いらっしゃいます」という第三者敬語はまったく使われず、聞き手敬語「います」のみが変動していることが分かる。これに対し、Jにおいては、第三者である一般社員を高める割合が1割～2割程度であった。

表3 TとJの統計表（場面3～6）

被調査者 場面と用語別	T		J	
	人数	比率	人数	比率
03 いる	8	13.1%	6	10.3%
03 います	36	<u>59%**</u>	19	32.8%
03 いらっしゃる	6	9.8%	4	6.9%
03 いらっしゃいます	11	18%	29	50.0%***
04 いる	4	6.6%	4	6.9%
04 います	30	<u>49.2%***</u>	12	20.7%
04 いらっしゃる	10	16.4%	5	8.6%
04 いらっしゃいます	17	27.9%	37	63.8%***
05 いる	6	9.8%	6	10.3%
05 います	33	<u>54.1%**</u>	18	31.0%
05 いらっしゃる	7	11.5%	5	8.6%
05 いらっしゃいます	15	24.6%	29	50.0%*
06 いる	2	3.3%	3	5.2%
06 います	30	<u>49.2%***</u>	11	19.0%
06 いらっしゃる	6	9.8%	6	10.3%
06 いらっしゃいます	23	37.7%	38	65.5%*

\* $p < .05$  \*\*  $p < .01$  \*\*\*  $p < .001$

※下線で示したのは場面Tの使用率が高い場合である。

網掛けで示したのは場面Jの使用率が高い場合である。

表 3 は聞き手が自部門の一般社員の場合で、自他部門の係長（場面 3 と 4）と課長（場面 5 と 6）が話題人物であるときに何と云うかという質問に対する結果を示したものである。場面 3～6 では、T が「います」を多用するのに対して、J が第三者敬語である「いらっしゃいます」を多く使っている。両者の間に統計的な有意差が見られた。データをみると、T は話題人物が自他部門の係長や課長の場合、第三者敬語（いらっしゃる、いらっしゃいます）が 2 割～4 割ほど使われているにすぎないのに対して、J は 5 割～7 割程度にも達していることが分かった。J は T より自分の上位者である人を上位に待遇する傾向（半分以上）があると観察された。

#### 4.2 場面 7～11（聞き手が係長）

表 4 T と J の統計表（場面 7～9）

被調査者 場面と用語別	T 人数	T 比率	J 人数	J 比率
07 いる	3	4.9%	2	3.4%
07 います	41	67.2%	38	65.5%
07 おります	17	27.9%	10	17.2%
07 いらっしゃいます	0	0%	8	13.8%
08 いる	3	4.9%	1	1.7%
08 います	48	<u>78.7%*</u>	35	60.3%
08 いらっしゃいます	10	16.4%	22	37.9%**
09 いる	2	3.3%	1	1.7%
09 います	33	<u>54.1%***</u>	13	22.4%
09 いらっしゃる	1	1.6%	2	3.4%
09 いらっしゃいます	25	41.0%	42	72.4%***

\* $p < .05$  \*\*  $p < .01$  \*\*\*  $p < .001$

※下線で示したのは場面 T の使用率が高い場合である。

網掛けで示したのは場面 J の使用率が高い場合である。

表 4 は聞き手が自部門の係長の場合で、自他部門の一般社員（場面 7 と 8）或いは他部門の係長（場面 9）が話題人物であるときに何と言うかという質問に対する結果を示したものである。統計結果から分かるように、場面 7 と 8 において、T と J は「います」を多用する傾向が共通であるが、話題人物が自部門の一般社員の場合（場面 7）は、「おります」という謙譲語がそれぞれ 27.9%、17.2%使われているのが特徴である。「おります」という用法について、もともと低められる主語は原則として一人称者（自分側の人間）であり、自分側を低めて述べることによって、話し手が聞き手に対してへりくだった、つまり丁寧さを表す機能がある。聞き手に対する「丁寧」さを表す謙譲語は、丁寧語「です・ます」の機能に通じるものがある。つまり、謙譲語「おります」は事実上、聞き手に対する対話の敬語として機能しているといつてよい。

また、係長を聞き手とし、自他部門の一般社員について言及する際、つまり聞き手から見て高める対象とは思われない場合、T はあまり一般社員のことを上げて待遇しないのに対して、J は第三者敬語「いらっしゃいます」の使用率が 37.9%にも達しているのが観察された。

場面 9(他部門の課長が話題人物の場合)では、T が「います(54.1%)」と「いらっしゃいます(41%)」を多用しているのに対して、J がほとんど「いらっしゃいます(72.4%)」に集中しているのが分かった(\*\* $p < .001$ )。

上で見てきたように、話題人物が聞き手の下位または対等な関係にある場合、J は T より第三者敬語である「いらっしゃいます」を多く用いる傾向があると観察された。つまり、J においては、話題人物を上位に待遇することにより、間接的に聞き手を待遇しようとする傾向が顕著であることが明らかになった。敬語研究では、この現象を「第三者敬語の聞き手敬語化」という。ここでいう「第三者

敬語の聞き手敬語化」とは、井上（1972）が指摘したもので、「話題人物への敬語が、第三者を敬うためではなく、実は話し手相手への敬意を表すために用いられる」という概念である。

表 5 T と J の統計表（場面 10～11）

被調査者 場面と用語別	T	T	J	J
	人数	比率	人数	比率
10 います	22	<u>36.1%**</u>	8	13.8%
10 いらっしゃる	2	3.3%	1	1.7%
10 いらっしゃいます	37	60.7%	49	84.5%**
11 います	24	<u>39.3%***</u>	6	10.3%
11 いらっしゃいます	37	60.7%	52	89.7%***

\* $p < .05$  \*\*  $p < .01$  \*\*\*  $p < .001$

※下線で示したのは場面 T の使用率が高い場合である。

網掛けで示したのは場面 J の使用率が高い場合である。

表 5 は聞き手が自部門の係長の場合で、自他部門の課長（場面 10 と 11）が話題人物であるときに何と言うかという質問に対する結果を示したものである。データから分かるように、係長に対して、課長のことを高める割合が 6 割～9 割であり、表 4 の一般社員や係長に比べて格段に増すことが観察された。ここでも、J は T より第三者敬語の「いらっしゃいます」を多用する傾向がある。

#### 4.3 場面 12～18（聞き手が課長）

表 6 T と J の統計表（場面 12～16）

被調査者 場面と用語別	T	T	J	J
	人数	比率	人数	比率
12 いる	3	4.9%	2	3.4%
12 います	37	60.7%	33	56.9%

12 おります	18	29.5%	16	27.6%
12 いらっしゃいます	3	4.9%	7	12.1%
13 いる	3	4.9%	1	1.7%
13 います	49	<u>80.3%**</u>	34	58.6%
13 いらっしゃいます	9	14.8%	23	39.7%**
14 います	35	<u>57.4%***</u>	15	25.2%
14 おります	14	23.0%	10	17.2%
14 いらっしゃいます	12	19.7%	33	56.9%***
15 います	34	<u>55.7%***</u>	15	25.9%
15 いらっしゃいます	27	44.3%	42	72.4%**
16 います	29	<u>47.5%***</u>	9	15.5%
16 いらっしゃいます	32	52.5%	49	84.5%***

\* $p < .05$  \*\*  $p < .01$  \*\*\*  $p < .001$

※下線で示したのは場面 T の使用率が高い場合である。

網掛けで示したのは場面 J の使用率が高い場合である。

表 6 は聞き手が自部門の課長の場合で、自他部門の一般社員（場面 12 と 13）或いは自他部門の係長（場面 14 と 15）或いは他部門の課長（場面 16）が話題人物であるときに何と云うかという質問に対する結果を示したものである。統計結果から分かるように、話題人物が自部門の一般社員の場面を除いて、T は「います」を多用するのに対して、J は第三者敬語の「いらっしゃいます」を多く用いることが明らかになった。両者の間に統計的な有意差が見られた (\*\*  $p < .01$ 、\*\*\*  $p < .001$ )。また、謙譲語「おります」は場面 12（自部門の一般社員）と 14（自部門の係長）において使われていることも観察された。それから、話題人物が一般社員や係長の場合、聞き手の課長に対して、「いらっしゃいます」を多用する、いわゆる「第三者敬語の聞き手敬語化」という傾向もあったといえよう。

さらに、表 4 と表 6 における「第三者敬語の聞き手敬語化」の使

用をより詳しく考察した結果、その用法は一般社員よりは係長、係長よりは課長、それから同じ部門の者よりは他部門の者を話題人物とする場合に多く用いられることが明らかになった。特に J は T より顕著であることが改めて実証された。

表 7 T と J の統計表 (場面 17～18)

場面と用語別	被調査者 T		被調査者 J	
	人数	比率	人数	比率
17 います	13	21.3%	12	20.7%
17 いらっしゃいます	48	78.7%	46	79.3%
18 います	10	16.4%	8	13.8%
18 いらっしゃいます	51	83.6%	50	86.2%

\* $p < .05$  \*\*  $p < .01$  \*\*\*  $p < .001$

※下線で示したのは場面 T の使用率が高い場合である。

網掛けで示したのは場面 J の使用率が高い場合である。

表 7 は聞き手が自部門の課長の場合で、自他部門の部長 (場面 17 と 18) が話題人物であるときに何と云うかという質問に対する結果を示したものである。データから分かるように、TJ ともに課長に対して、部長のことを高める割合が 7 割～8 割であり、「いらっしゃいます」の第三者敬語を使う傾向が一致している。

#### 4.4 まとめ

これまでに述べてきた諸点を整理すると次のようになる。

(1) 聞き手が一般社員の場合、会社内部の人について言及する際、聞き手敬語 (です/ます) をあまり使わないことが予想された。実際は、聞き手敬語の使用が高くなり、話題人物が自部門の一般社員である場合を除いて、聞き手敬語が使われていない比率は 1 割前後にとどまっていることが興味深い結果である。なお、話題人物が係長や課長などの目上の場合、T は「います」を多く用いるのに対し



て、Jは「いらっしゃいます」という第三者敬語を多用する。つまり、聞き手が一般社員の場合、Tは話題人物の上司である係長や課長のことをあまり上位に待遇しない傾向があるのに対して、Jは半数以上が上司のことを高めていることが観察された。

(2) 聞き手が係長や課長の場合、聞き手より職階の低い自部門の人に言及する際、聞き手敬語「います」のほか、同じく聞き手敬語の機能を持っている謙讓語「おります」が混在されていることが一つの特徴である。

(3) 聞き手が係長や課長の場合、話題人物が聞き手から見て下位または対等な関係にある場合に注目してみると、JはTより話題人物のことを上げて待遇する割合が高く、聞き手と話題人物を同時に高める「第三者敬語の聞き手敬語化」が顕著であることが明らかになった。

(4) 「第三者敬語の聞き手敬語化」が使われやすい傾向としては、内外の関係から見れば、ウチよりソトのほう、上下関係から見れば、一般社員より係長、係長より課長のほうが使われやすいことが明らかになった。無論、「第三者敬語の聞き手敬語化」の使用について、TJともに聞き手と話題主との上下関係と内外関係に影響される。特に同じ職階の自他部門の話題主について言及するとき、他部門の人に対し、第三者敬語をより多く用いる点からみて、Jでは上下関係よりも、内外の関係に左右されることがTより顕著であることが観察された。つまり、同じ会社でも、違った部門の「内外」意識によって制約を受ける傾向があると言えよう。

(5) 全体的にJはTより「第三者敬語」を多用する傾向があるが、自他部門の最上位者である部長について言及する際、第三者敬語の使用率が最も高いことがTJ共通であることが分かった。最上位者に対する上下関係の意識が働いていることが考えられる。

## 5. 終わりに

以上台日の会社員を対象としたアンケート調査を行い、第三者敬

語使用という観点から台日の共通点や相違点について考察を行ってきた。今回は自部門の人を聞き手とした場合のみについて、話し手の聞き手と話題主との関係を中心に取上げた。他部門の人あるいはお客さんを聞き手にする場合、話題人物への敬語使用はどうかなどの問題についても、さらに詳しく考察すべきであるが、稿を改めて論じることとしたい。第三者敬語の問題は山積しているが、本研究における台日の敬語の使用実態が何らかの一助となるならば、望外の喜びである。

#### 参考文献：

- 東弘子（2004）「『話題の人物』の待遇を決定するシステム」『名古屋大学国語国文学』、P. 1-13
- 井上史雄（1972）「第三者への敬語」『国語学』90集
- 菊地康人（1994）『敬語』角川書店
- 姜錫祐（2001）「話題にのぼる上位人物に対する敬語運用——市役所職員を対象にした調査結果から——」『社会言語科学』4巻1号、P. 91-102
- 金淑美（1995）「韓・日敬語用法の対照研究——話題の人物の待遇を中心に——」『日本語教育』85、P. 66-79
- 金順任（2005）「日韓の社会人における第三者敬語の対照研究——アンケート調査の結果から——」『日本語科学』18巻、P. 95-110
- 熊井浩子（1988）「現代日本語における『敬語誘発』について」『国語学』152集、P. 31-46
- 黄鴻信（1992）「職場における私的場面の敬語行動——職階差と年齢差を中心に——」『東北大学文学部日本語科学論集』第2号
- 辻村敏樹（1977）「日本語の敬語の構造と特質」『講座日本語』4巻  
岩波書店
- 鄭惠卿（1989）「現代日本語における『話題主』と『聞き手』の上下関係が話し手の敬語表現に及ぼす影響」『日本語と日本文学』11巻、P. 9-28

芳賀純（1979）「敬語の心理学」『国文学 敬語の手帳』26 卷 2 号学  
燈社

日本語記述文法研究会編（2009）『現代日本語文法第 12 部談話、第  
13 部待遇表現』7 くろしお出版

三上章（1972）『現代語法新説』くろしお出版

## アンケート調査

この調査は、日系企業で働いている台湾人の実際の言語使用を調べるために企画したもので、正解はありません。普段あなたの話す通りに気軽にお答えください。今回の調査結果は研究目的以外には決して使いません。お忙しいところ誠に恐縮ですが、ご協力をお願いいたします。

高雄餐旅大学応用日本語学科副教授 吳 岳樺

調査時間： \_\_\_\_\_年 \_\_\_\_\_月 \_\_\_\_\_日

会社名： \_\_\_\_\_ 性別： 男・女

年齢： \_\_\_\_\_ 職歴： \_\_\_\_\_年 日本語能力： 二級・一級

Eメール： \_\_\_\_\_

(回答について不明な点などがあつたら連絡させていただきます)

**【場面】**(あなたは一般社員であると仮定する) 同じ部門(他の部門)の一般社員の年齢と職歴は自分と同じです。係長(課長・部長)の年齢と職歴はすべての一般社員より上です。

あなたが会社の廊下を通過中。同じ部門の(一般社員、係長、課長)があなたに「田中さん(話題の人物)は今会議室にいるかどうか」を尋ねました。あなたは田中さん(話題の人物)が“今会議室にいる”と言いたい場合、「いる」のところをどう言いますか。また、田中に対する「呼称」の部分もご記入ください。**【田中さん(話題の人物)はその場にいません】**

— A — は今会議室に — B —。

選択肢は次の通りです。下線のところに番号をご記入ください。

- A : ①田中 ②田中さん ③係長 ④田中係長 ⑤課長  
⑥田中課長 ⑦部長 ⑧田中部長

- B：①いる ②います ③おる ④おります ⑤いらっしゃる  
⑥いらっしゃいます

(一) 聞き手：同じ部門の一般社員

話題の人物（田中）：一般社員／係長／課長

- ①同じ部門の一般社員に対し、（話題人物の田中が同じ部門の一般社員）\_\_\_\_は今会議室に\_\_\_\_。
- ②同じ部門の一般社員に対し、（話題人物の田中が他の部門の一般社員）\_\_\_\_は今会議室に\_\_\_\_。
- ③同じ部門の一般社員に対し、（話題人物の田中が同じ部門の係長）\_\_\_\_は今会議室に\_\_\_\_。
- ④同じ部門の一般社員に対し、（話題人物の田中が他の部門の係長）\_\_\_\_は今会議室に\_\_\_\_\_。
- ⑤同じ部門の一般社員に対し、（話題人物の田中が同じ部門の課長）\_\_\_\_は今会議室に\_\_\_\_。
- ⑥同じ部門の一般社員に対し、（話題人物の田中が他の部門の課長）\_\_\_\_は今会議室に\_\_\_\_。

(二) 聞き手：同じ部門の係長

話題の人物（田中）：一般社員／係長／課長

- ①同じ部門の係長に対し、（話題人物の田中が同じ部門の一般社員）\_\_\_\_は今会議室に\_\_\_\_。
- ②同じ部門の係長に対し、（話題人物の田中が他の部門の一般社員）\_\_\_\_は今会議室に\_\_\_\_。
- ③同じ部門の係長に対し、（話題人物の田中が他の部門の係長）\_\_\_\_は今会議室に\_\_\_\_。
- ④同じ部門の係長に対し、（話題人物の田中が同じ部門の課長）\_\_\_\_は今会議室に\_\_\_\_。
- ⑤同じ部門の係長に対し、（話題人物の田中が他の部門の課長）\_\_\_\_は今会議室に\_\_\_\_。

(三) 聞き手：同じ部門の課長

話題の人物（田中）：一般社員／係長／課長／部長

- ①同じ部門の課長に対し、（話題人物の田中が同じ部門の一般社員）  
\_\_\_\_\_は今会議室に\_\_\_\_\_。
- ②同じ部門の課長に対し、（話題人物の田中が他の部門の一般社員）  
\_\_\_\_\_は今会議室に\_\_\_\_\_。
- ③同じ部門の課長に対し、（話題人物の田中が同じ部門の係長）  
\_\_\_\_\_は今会議室に\_\_\_\_\_。
- ④同じ部門の課長に対し、（話題人物の田中が他の部門の係長）  
\_\_\_\_\_は今会議室に\_\_\_\_\_。
- ⑤同じ部門の課長に対し、（話題人物の田中が他の部門の課長）  
\_\_\_\_\_は今会議室に\_\_\_\_\_。
- ⑥同じ部門の課長に対し、（話題人物の田中が同じ部門の部長）  
\_\_\_\_\_は今会議室に\_\_\_\_\_。
- ⑦同じ部門の課長に対し、（話題人物の田中が他の部門の部長）  
\_\_\_\_\_は今会議室に\_\_\_\_\_。